

一八八二年十二月某日

バブラーム等と共に自由意志についての話——トーター・プリーの自殺の決心

タクール、聖ラーマクリシュナは南神村ドブキネーヨルの寺院で正午過ぎ、ご自分の部屋の西側のベランダで話をしておられる。そこに同席しているのはバブラーム、校長、ラームダヤールそのほか。キリスト暦一八八二年十二月のある日。バブラーム、校長、ラームダヤールの三人は今日、ここに泊まっていく予定である。冬休みになっていたので、校長は明日も滞在するつもりでいる。バブラームは、ごく最近来るようになったばかりである。

聖ラーマクリシュナ、信者たちに——

「ありとあらゆることは、一切合切みな神様がなさるのだ、という智慧が持てたら、この身このままて解脱できる。ケーシャブ・センがシャンブー・マリツクといっしょにここへ来たときに、わたしはこう言つて聞かせたよ。木の葉一枚だつて、神様のご意思がなければ動かない」と。自由意志はどこにある？　すべては神様のおこころ次第だ。ナングタ（トーター・プリー）はたいそう智慧のすぐれた人だったがね、あの人でさえも川で投身自殺しようとした。ここに十一ヶ月もいたんだが——胃が悪くなつて、あんまり苦しいものだから我慢出来なくなつて、ガンジス河で溺れ死のうとしたんだよ！

沐浴場のあたりは遠浅なものだから、いくら進んで行っても水はヒザより上に来ない。そのときハツと気がついて、悟るところがあつて引き返してきた。私もいちど、ひどく意気消沈してしまつて、辛抱出来ずに喉をナイフで切るところだった！ だからわたしは、いつも言うのだ。大実母よ、わたしは道具であんたが使い手。わたしは馬車であんたが馭者。進める通りにわたしは進む。させる通りにわたしはする。」

タクルの部屋の中から歌声が起こつた。信者たちが歌をうたい始めたのである。

わが胸のプリンダーヴァンに

いざ住み給え 主なるクリシュナ

わが熱き信仰と愛は

ラーダーとなりて 君に仕えん

解脱を求める わが希いは

君をとりまく ゴーピーの群れ

わがこの肉体は 養父なるナンダの家

やさしい心は 養母のヤシヨードー

わが胸の罪の丘なるゴヴァアルダナを指で取り去り

ゴヴァアルダナ——プリンダーヴァン近くの  
丘。洪水から村人を守るため、クリシュナは  
この丘を指で持ち上げた。

カンサ(悪魔)より来し色欲などの

六つの煩惱を現下に滅し

慈悲の笛を吹き鳴らして

心の乳牛を手なずけて

とどまり給え わが胸の牧場に

願わくは 願わくは とどまり給え

わが愛は ヤムナーのほと

わが希望は バニヤンの樹陰

懐かしき故郷にくつろぎ給いて

永くこの地に 住みたまえかし

牛飼いの愛にほだされ

ヴラジャの牧場にとどまり給えば

この愚かなる牛飼いは

おお主よ、君の僕となりて仕えん

カンサ——クリシュナに殺される悪王

六つの煩惱——色欲、怒り、貪欲、高慢、嫉妬、  
愛着

ヴラジャ——マトウラー近くの牧場

歌声は続く——

いざ歌え

わが生命いのちの籠かごに棲む鳥よ

万願成就のブラフマンの

樹に止まりて いざ鳥よ

主を讃えて 高らかに歌え

歌えよ 歌え

歌えよ 歌え

正義ダルマ、富アルタ、愛カーマ、自由モクシャ

熟うれた四つの実を食べよ

ナンダンバガンのスリナート・ミトラが友人たちを連れて入ってきた。タクールは彼を見ておっしやった。「この人の目を見ると、心の中身がすっかり見えるよ！ ちょうど、ガラス戸越しに部屋の中の品物がみんな見えるようだ」スリナート、ジャガンナート等はナンダンバガンの兄弟揃ってのブラフマ協会で、この人たちの家で毎年ブラフマ協会の祝祭が行われていた。祭りを見に、タクールも以前そこへ行かれたことがある。

日が暮れて、神殿では夕べの祈りが始まった。部屋の小ベッドの上に坐って、タクールは神を黙想

しておられる。そして次第に、前三昧状態に入っていかれた。しばらくして平常に戻り、タクルルは次のような言葉をおっしゃった。

「大実母よ、あれも引っぱっておくれ。あれはたいそう信心深い生まれつきだ。あんたのそばに来ようとしているから！」

タクルルはバブラームのことをおっしゃっているのか？ バブラーム、校長、ラームダヤールたちがその場に坐っていた。夜の八時か九時ころであった。タクルルは三昧の種類サマーデーについて話して下さった。ジャダ・サマーデー、チエータナ・サマーデー、ステイタ・サマーデー、ウンマナ・サマーデーについての説明である。

〔ヴィディヤサーガルとジンギス・カン、神はいるのか？ 聖ラーマクリシユナの答え〕

幸福と不幸、喜びと悲しみという話題になった。神はこんなに多くの悲しみや不幸を、なぜお創りになったのだろうか？

校長「ヴィディヤサーガルが、いつか憤慨して言っておりました。『神なんか呼びかける必要はありませんよ！ ジンギス・カンがある国に攻め入って略奪し、多くの人を捕虜にした。その数は十万人にも達した。將軍たちがやって来てこう言った。『帝よ、誰があれどもを養うのでありますか？ あれらをそばにおくのは我々にとって危険、逃がしてやるのもまた危険であります。いかが取り計らいましょうや？』そのとき、ジンギス・カンは答えました。『それではどうしようか。そうだ、

一人残らず殺してしまえ。それで、彼らをバラバラに切り刻め」という命令が出た。この大量虐殺を、神はご覧になった筈でしょう？ とにかく、ちつとも止めようとはなさらなかった。だから、神が存在しているようがいまいが、私にとっては必要とは思いません。私は何のお陰も受けてはおりません！」

聖ラーマクリシュナ「神の行動が、人間に理解出来るとも思っているのかい？ あの御方がどんな目的で何をなさるのかということが——。あの御方は、創つたり、放つておいたり、ぶつ壊したりなさる。あの御方が何故壊すのか、わたしたちに分かることだろうか？ 私はいつもこう言う。大実母よ、わたしはあなたを理解する必要はない。ただ、あなたの蓮華の御足を信仰させておくれ」とね。人間一生の目的は、この信仰を獲ることなんだ。ほかのことは皆、大実母がよく御存じだ。マンゴーを食べるために果樹園に来ているんだよ、樹が何本か、枝が何本か、葉っぱが何千枚あるか、そんなことを坐りこんで勘定する必要がどこにある？ わたしはさつさとマンゴーを食べるだけさ。木や葉っぱを勘定する必要なんかないんだ」

タクルの部屋の床の上で、今夜は、バブラーム、校長、ラームダヤールの三人が横になって寝た。真夜中の二時か三時ころ、タクルの部屋の明かりは消えていた。タクルはご自分のベッドに坐ったまま、時々信者たちと話をしておられた。

〔聖ラーマクリシュナとバブラーム、校長たち——ダヤーとマヤー——きびしい修行と見神〕  
聖ラーマクリシュナは、校長はじめ信者たちにお話しして下さる——

「いいかい、慈悲と愛着は別なものだよ。愛着というのは自分に属していると思つてゐるものに対して執着だ。たとえば父さん、母さん、兄弟、妻や息子などをかわいいと思う気持ちだ。慈悲はすべての生き物をかわいがる気持ちのこと。分け隔てのない公平な気持ちだ。慈悲心のある人を見たら、神様のお恵みを受けている人だと思え。慈悲心からすべての生き物に奉仕するのだ。だが、愛着も神様から来る。愛着を通して、あの御方は人を家族や縁者に奉仕させなされる。

けれどもよくお聞き。愛着は人を無智にしておいて、この世に縛りつける。だが、慈悲は精神を清浄にする。そして、だんだんと縛りを解いていく。

精神が清浄にならなければ、見神は出来ないからね。色欲や怒りや貪り心に打ち克つことが出来たら、あの御方のお恵みがいただけるよ。そうするとお会いできるんだ。これはほんとに秘密の話なんだが、性欲に勝つためには、わたしだつて実にいろんな方法を試したものだよ。手を叩きながら、ジャイ・カーリー、ジャイ・カーリー（カーリーに勝利あれ）と叫んで、アーナンダ・アーサナをしながら周囲をぐるぐる歩きまわつてみたり、ずいぶん工夫したものだ。

わたしが十のとき——まだ郷里にいた時分だが、はじめてあの状態（サマーディ）になった。野原を歩いていたらあるものが見えて、それが大波のように覆い被さつてきた——見神にはいくつかの特徴がある。光を見る、歓喜を感じる、胸の中で火花が噴き上がるように大風が湧き上がる——」

翌日、バブラーム、ラームダヤールは家に帰つた。校長は更に一日一夜をタクールと共に過し、食事には神殿の供物のお下がりを頂戴した。

(訳注) アーナンダ・アーサナー・タントラの修行法の一つで、性欲を克服するために若い裸の女性を坐らせておいて、その女性を女神として礼拝する修行法。タントラを教えたヴァイラヴィー・ブラフマニーも聖ラーマクリシュナの指導の一つとして、若い女性の膝の上に坐ってジャバをさせるなどして、この修行をさせたことがある。